

■東北大学 下川宏明教授

らは呼吸困難や疲れなどを起こし、心不全に陥る恐れがある難病「肺動脈性肺高血圧症」の悪化を防ぐ化合物を特定した。ラットで試したところ、症状の悪化を抑えた。治療薬の開発を目指し、2020年にも臨床研究を始めた。考えだ。成果は米科学誌「サーキユレーション・リサーチ」(電子版)に掲載した。

肺動脈性肺高血圧症は、心臓から肺に血液を送る肺動脈の細胞が異常に増え、心臓に

肺高血圧症の悪化 防ぐ化合物を特定

負担をかける。血管を広げる既存薬では細胞の増殖を止められず、肺を移植する以外に根本的な治療法がない。

研究チームは患者の肺から取った細胞に約5600種類の化合物を加え、効果のあるものを探索。一部の植物に含まれるセラストラマイシンが細胞増殖を止めることが分かった。肺高血圧症のラットで効果を確かめた。炎症などに関わるたんぱく質に作用し、細胞の増殖を抑えたとみている。

2019年7月8日付日本経済新聞朝刊9面
©日本経済新聞社 許諾番号30070724
無断複製転載を禁じます。